魔法少女デュエリスト

体験版

作：@１０３９

■登場人物

朝生志保（あそうしほ）

勝気でハツラツとした赤毛のショートカットの少女。イギリス人の祖母が魔女の血をひいていて、スカイブルーの瞳と魔法使いとしての天才的な素質を持つ。紺のブレザー、赤いチェックのミニスカ、黒いマントという魔術服に変身できる。

魔女としてはクォーターの血筋だが、隔世遺伝なのか突然変異なのか純粋な魔女を凌ぐ魔力と魔女としての天賦の才を持つ。イギリスの魔法学校に強制的に入学させられたが普通なら１１歳で入学して８年かかるところを３歳から５年でトップの成績で卒業するほどの天才。日本では３歳までと８歳からの数年しか生活してない割に帰国子女っぽさが既に全くないほど適応性も高い。が、そんな才女の割にはお転婆で破天荒な性格をしている。

柊美紗（ひいらぎみさ）

クールで負けず嫌いなお嬢様気質。黒い絹糸のような長い髪と切れ長の瞳を持つ純和風な美少女。陰陽師の家系で大きな屋敷に住んでいる。巫女装束に変身できる。

西洋魔法を使う志保にライバル意識を持つが、その兄の龍太に惚れていることは決して知られないようにしている。

護符を使った術や四神の力を借りた陰陽術を使いこなす。名門の生まれ育ちというプライドであらゆる術の修得に努力を惜しまず、才能と血筋に恥じない実力を幼くして身に付け数々の妖魔を退治してきた実績の持ち主としての自信に溢れている。そのせいで少し自信過剰で他人を見下すところがあるが、そういう部分は見せないようにするところもある。

朝生龍太（あそうりゅうた）

志保の兄。レヴィル家の魔力は女系にしか遺伝しないため魔法の力は全くもってないが、好奇心旺盛で祖母の家から色々なアンティークを拝借してはトラブルを起こす。トレーディングカードオタク。

エフィルザーク

古代ヨーロッパで悪魔が封じられた石板をカード化して操った魔術師。世界を混沌に陥れようとした危険性に気づいた聖職者たちによって神木の箱に封じられる。

■あらすじ

異形の怪物から魔法の力で人々を守る二人の魔法少女が、古の魔術師によって呪いのゲームで争うことになる。それが淫らな罠であるとも知らずに。

赤毛のショートカットとスカイブルーの瞳が印象的な西洋魔女の血を引く勝気な魔法少女と伝統ある陰陽道の一族を代表する巫女装束の清楚なお嬢様。

お互いが出すカードからモンスターが現れ、実際に襲いかかってくる。しかも汚れを知らぬ少女たちに淫靡で卑猥な攻撃をしかけてくる。

陵辱から逃れるために相手を陥れながら、二人は未成熟な身体の隅々まで穢されていく。そして、魔術師の悪辣な工作により少女たちは最も神聖なところまで濁った肉欲に侵食されていく。

「まずは東洋魔術の娘、ミサといったな。お前のターンだ」
美少女陰陽師は緊張しながら手持ちのカードを改めて見直す。ライバルではあるが幼馴染でもある魔法少女たちは、コレクター癖を持つ龍太の相手をしてカードバトルをしたことは何度もある。もちろん魔法などかかっていないただのゲームだ。細かいルールは違うかもしれないが、大体何をすべきかはなんとなく二人とも分かっている。もちろん魔具を使ったカードゲームにおぞましい効果があるとまでは考えが及んでいないのだが。
「じゃあ、まずはこのカードを！」
扇状に構えたカードの中から一枚のカードを抜き取る。エフィルザークの目配せを受けて、木板の床にそのカードを投げ置く。カードに触れるとそのカードの名前と大体の効果が感覚的に読み取れた。
「出でよ！　パペットマスター!!」
カードに描かれていたのは赤い眼が人形を糸で操る黒衣の悪魔の姿。カードから黒い煙が立ち上り、その悪魔が具現化される。
「魔界の傀儡使いは人形を作り出して、敵を攻撃できる」
エルフィザークの説明通り、小柄な黒衣の悪魔が緑色の肌をした手で床を撫でると木がうねりズルズルと伸び上がる。
「な、何これ！　どんな魔法のカードなのよぉ!!」
木の床から瞬く間に二対のマネキンのような人形が生まれ、それをパペットマスターが操る。シホは驚きの声を上げたが、ミサは恐ろしくて声も出ない。
（やっぱり、この禍々しさ……これは……私たち、とんでもないゲームをやらされてるのでは……）

ようやく冷静に事態を見始めたミサだが、既に自分でカードを切ってしまっている。もう事態を見守るしかない。
「ぐふふ、感じるぞ。懐かしい魔力を感じる。今宵の餌食はレヴィル家の娘か。お前も私の操り人形にしてやろう！」
パペットマスターが不気味に呟く。その両手が人形を押し出すようにバッと拡げられると、マネキンのような木人形がシホの側にジャンプする。
「早っ！　って、ちょ、何これぇ!!」
マネキンの一体がツタのようになって少女の身体を絡め取る。それぞれ腕だったところが小さな魔法使いの両手の自由を奪い、足は絡みついた上に足元の床と同化して動けなくなってしまう。
「これで、お前の自由は我が手の中……小生意気な娘が多い血筋だが、お前もそうか？」
黒衣の中から顔も見せずにパペットマスターがしわがれた声で聴いてくる。
「な、何よ！　アンタが何でアタシの一族のことを知ってんの!?　カードから出てきただけの化物のくせに!!」
身体の自由を奪われているが、散々魔法生物と戦う日々を送ってきた少女にはこの程度のことは動じるようなことでもない。だが、カードが作り出した魔法生物だと思っていた相手に、まるで大昔の記憶があるようなのが気になる。
「貴様の千倍は長く生きてきた私を下等な魔法生物と同等に見なすとは、やはりお前の一族は生意気な魔女ばかりだな。だが、その方がいたぶり甲斐があって良い……」
不気味に笑うパペットマスターがもう一体の人形を動かす。人形の口が開き、中からズルリと樹液でぬめったツタが伸び出してくる。

「一体、これは……あなた、何をしようとしているんです!?」
巫女少女がパペットマスターに呼びかける。自ら呼び出した怪物がライバルとはいえ、同じ魔法使いにゲームだというのに物理的な攻撃をしようとしている風にしか見えない。止めるべきだと頭の中で警鐘が鳴っている。
「呼んだのはお前だろう？　黙って見ているがいい。勝たねば困るのはお前なのだからな」
召喚された者とは思えない口ぶり。困惑するミサはエフィルザークの方を見るが、魔術師も不敵に笑っているだけだ。
ジュルルルゥ！
結界の外から見ていた野次馬も息を飲んだ。いきなり人形の不気味な舌が触手のごとく伸びて魔法少女の細い足首に巻きついたかと思うと、ぬるぬるとした樹液で滑りながら黒いハイソックスに包まれた足を巻き取るように登り、白い太腿をヌメヌメと舐めるように這いずり……。
「うあぁぁっ！　ちょ、ちょっと！　な、何、何すんのよ、バカぁっ!!」
チェック柄のミニスカートの中に舌先が潜り込んでいって、周りから見ていては何が起きているか分からない。だが、顔を真っ赤にしている少女の反応から何となくは分かる。
（何なのこれぇっ！　パ、パンツの中に……や、やめてよぉっ!!）
周囲の目があるから声に出しては言えない。本当なら今すぐ両手でスカートを押さえたいところだが、もう一体の人形に身体を拘束されていて身動きが取れない。
ピチャ……ズル、ジュルウゥゥ……
粘液が肌に当たり、擦れる音が聴こえる。それにあどけない少女の抑えた呻き声だけが重なって聴こえる。

（や、やだよぉ……み、みんな静かにして、音聴こうとなんかしないでよぉ！）
舌先はお尻の方からパンティに潜り込んできた。純白のシンプルな下着に樹液が染みこんで柔らかな白肌にべっとり張り付いてくる。それだけでも不快なのにおぞましい人形の舌が尻の割れ目をなぞり、肛門に辿りつく。
「ひぃ！　あ、ちょ……そ、そこ……ちょっと、待ってよぉ……」
いつもはハツラツとして元気だけが取り柄とまで言われるシホの声が段々消え入りそうにかぼそくなっていく。公衆の面前で気味の悪い人形に排泄口を舐められているのだ。天真爛漫な少女だって、さすがに耐え難い恥ずかしさだ。
「きひひ、楚々として可愛らしい肛門じゃないか」
「う、うるさいぃっ！　な、何でアンタが、そんなこと……あ、やっ……うぅんっ！」
周囲がどよめく。パペットマスターの口から出た肛門という言葉。そして、アイドル並の容姿と人気を誇る少女のリアクション。
「わかるのさぁ……私が操る人形の感覚は全て伝わってくる。私の舌にはお前の肛門の皺の感触がしっかりと伝わってきてるよ、きひひ。舌の感覚の鋭さには自信があるからねぇ、皺の数まで数えられるんだよ」
「へ、変態！　気持ち悪いこと、言うなぁ……って、や、やめ……ひぁぁっ！」
歯噛みして目を閉じるショートカットの魔法少女。その目尻に悔しさで涙が滲む。声に出して周りに伝えられているのだ。
「ほれ、感じるんだろう？　この一つ目の皺、二つ目の皺……」
肛門を舐められて、皺まで数えられている。
「や、やめ……んあ、あ、くぅっ！　……こ、こんなことして、タダで済むと思ってんじゃ

ないでしょうねぇ！」
　魔力を昂ぶらせてキッと小さな悪魔を睨みつける。だが、手足は拘束されていて身動きが取れない。普段なら魔法の炎を呼び出して木人形たちを焼き尽くしているところだ。
「ぐふふ、言っておくがこのゲームの間は自慢の黒魔術は使えんからなぁ。だが、しばらくはカードを使うのも封じさせてもらうよぉ、きひひ」
「こ、このぉ……ひぃ、あ、うぅぅっ！」
　声が出そうになって周りの目を思い出して慌てて唇を噛んでこらえる。舌がさらに先に進んだのだ。性に疎いわけではない。何度か自分で弄ったこともある。だから、あの場所を弄られたらひとたまりもないことだって分かっている。
（や、やめて、やめてっ！　そ、それ以上進んだら、アソコ触られたら、ヤバイってぇっ！　い、生きていけないよぉっ!!）
　ジュル、ジュルルゥ……
　濡れた音が響く。唇を噛み締めた美少女の頬が紅潮し、小さな身体が震える。大勢の大衆が生唾を飲む音も聞こえる。
「ほれ、もっと鳴いてみせろ。みんな、お前みたいなガキが一丁前に盛ってるのをおもしろがってるぞ」
「そ、そんなこと……ない、よぉ……んぁ、あ、はあぁっ！」
　舌はまだ開くことを知らない陰唇をなぞり、禍々しい感触を少女に植え付けていく。だが、その感触の中におぞましくも甘美な背徳という快楽がうっすらと芽生えていることにまだシホは気づかない。少女の脳裏は今、羞恥で真っ赤に染まっているのだ。
「うぅ……ひぁ、ああ、あ、そ、そこ……だめ、だめだよぉっ……」

苦渋に満ちた表情を兄がじっと見つめている。潤んだ瞳の向こうにその姿を見てしまった少女はさらに恥辱に塗れていく。
（お兄ちゃんまで、変な目で見ないでよぉ……バカぁっ！）
そして、樹液に濡れた舌がツン、とその場所をつついた。
（ク、クリ……だめすぎぃ……）
首が仰け反り、腰がガクガクと震える。周りにいる人間たちはシホの年齢も知っている。どんなカバンを背負って学校に行っているか、授業中に悪ふざけしている姿すらテレビの取材で大勢の人が見たことある。
「驚きだなぁ。その年でもうこんなにクリトリスが感じるとはねぇ。よっぽど一人で慰めてるに違いあるまい」
「バ、バカ！　そんなデタラメ言うなぁっ！　ア、アタシ、そんなこ……ひゃうぅっ！」
その美少女が、ミニスカートの中で見えないとはいえ、おそらく淫核を舐められて感じている。化物に性感帯を弄られて喘いでいる。
「んぅ、あ……う、ああ、ひゃうぅ……や、やめろってばぁ……んぅあああっ！」
細く尖った舌の先端で突かれる度に身体がビクンビクンと震えて反応してしまう。今まで出したことのない甘い嬌声がもう止められなくなっている。
「シ、シホ！　しっかりしろ！　負けちゃダメだよぉ！」
「そ、そんなこと……言ったってぇ……あぁ！　やぁ、み、見ないでよぉっ!!」
兄の声もむなしく響く。兄とライバル、それに大勢の知らない人たち、テレビカメラまでいる。そんなところで恥ずかしいところを怪物に弄られて感じてしまっている。
（こ、こんな恥ずかしいのないよぉ！　な、なんなのこれっ！）

ピクピクと身体を震わせる愛らしい少女。だが、この程度の羞恥は序の口に過ぎなかった。自分でも知らない境地に貶められるなど、小さな魔法少女には想像すらできていない。
「ぐふ、だいぶノッてきたな、レヴィル家の娘。では、一気に行くとしようか」
パペットマスターが腕を振る。木人形の舌が更に伸びる。だが、まだ先端は動いていない。つまり、先端から根元までどんどん余った部分が増えている。惚けた頭にも何となく次にどうなるか分かってきた。
「ダ、ダメ……ダメ……そ、それ無理、無理だよ……やだ、やだぁっ！」
必死にジタバタしても拘束された身体は動かない。それどころか今まで身体を拘束していただけの人形も舌をだし、首筋を舐めるようにして白いブラウスの襟元から服の中に入ってくる。ボタンが弾け飛び、木舌がズルズルと柔肌を這い回る。もう逃げようもない。
「あ、あ、や、やあぁあぁっ!!」
ズジュルルルゥゥゥッ!!
伸びた舌が一気に股間を滑り抜けていく。無限のジェットコースターに乗っている気分。それも羞恥のコースターだ。樹液に塗れた舌が肛門、割れ目、そして最も敏感な肉突起を一気に擦っていく。
性的なイメージからは遠い健康的な可愛らしさに満ちているショートカットの魔法少女。清潔感に溢れたブレザータイプの魔法服を纏った太陽のように陽気で気さくな少女。
「ひぎ、あぁっ！　も、と、止めて……止めて止めて止めてってぇっ！　か、感じすぎちゃうぅぅっ！　あ、あぁ、んあぁぁっ!!」
そのアイドル的な魔法使いの少女が、怪物に陰唇を責め立てられて公衆の面前で快楽に飲まれている。

「ぎひひ、じゃあ、止めてやろうかねぇ」
「あ、あぁ……と、止まった……？」
ガクガクと膝を震わせているシホ。足元からと首筋から伸びている舌で今や全身がねっとりとした舌に絡まれている状態。だが、気持ち悪いはずなのに全身が甘美に火照ってしまっている。
「さて、小娘……どこで感じた？」
「……え？」
まだ終わったわけではない。終わるわけもない、と頭では分かっていたはずだった。
「どこで一番感じたのか、野次馬たちに教えてやりなさい。そしたら、許してあげよう」
身体を嬲るだけではないのだ。人形使いは、精神的にも少女を追い詰めていく。
「そ、そんな……こと……い、言えるわけないじゃん……」
言わなければ、もっと恐ろしいことになる。わかってはいたが、公衆の面前で自らの口でいやらしいことを言うこともできるはずがない。
「ぎひひ、残念。じゃ、言うまで続けようか……」

◆続きは本編で愉しんでください！